

石巻の災害活動に参加して

新座山の会 加納 隆夫

2011年6月4～5日作業（兵庫県連は5～6日作業）

活動現場 宮城県石巻市渡波(ワタハ)字千刈田(チガリダ)41番地

参加者 埼玉労山 金井（所沢ハイキング） 長谷川、谷脇（大宮労山）

井上、瀧見、佐藤、嶋田、加納（新座山の会）8名

千葉労山8名 群馬労山10名 宮城労山3名 兵庫労山2名 合計31名

スコップ、長靴、ヘルメット、マスク、タオル、テント、シュラフ、グランドシート、着替え、食糧等を車に積み込む。テント泊の山行以上の装備である。埼玉の8名は3日の夜7時ごろ、それぞれ東京を出発し東北自動車道で現地に向かう。途中、福島あたりから道路の凹凸が気になる。23時半ごろトイレと自販機しかない泉PA(仙台南の先)で合流し仮眠する。車の往来が激しく、うるさくてよく眠れない。震災前には、こんなに車の往来はなかったという。

4時半に起床し簡単な朝食を済ませ、6時ごろ出発。東北道から三陸道経由で、石巻に向かうが至る所に段差注意の看板が出ている。地震により地盤が凹凸しているのを応急修理で通行できるようにしたのだろう。三陸道の終点近くなると渋滞が始まる。他県ナンバーの車が多い。石巻市内に入ると、とんでもない光景が目飛び込んでくる。崩れてしまった家々、土台しか残っていない平らな広い土地。潰されて道路わきに打ち捨てられた多くの車。墓地のど真ん中に運ばれている車もある。磯とヘドロの混じった匂いが鼻に付く。営業している商店はほとんどない。やっているのはコンビニとガソリンスタンドくらいである。渡波地区に入ると地盤が40～50cmも下がったため、雨で床下まで水に浸かった家が多く見られた。8時ごろ田園地帯の千刈田に入る。畑や田んぼの中には津波で流されてきた車が多数残っている。こうした車がなければ、ここまで津波が押し寄せたとは思えない風景である。しかし、ここにも胸位まで津波が来たという。現場である亀山さん宅のビニールハウス(20m×50位)には1～2cm程の塩と硫化水素を含むヘドロの層が積もっている。これを取り除くのが我々の作業である。

長靴、帽子、マスク、軍手で身繕いし作業に入る。山行と一緒に50分作業し10分休憩。鋤簾(シヨリ)でヘドロを削り、スコップで掬い、ネコ(一輪車)に載せて外に捨てる。ハウスの中は蒸し暑い。夏になったら堪らないだろう。多くの方は慣れない作業なので無駄な力が入り、額からは汗が流れ、足腰が痛くなる。

11時半、早めの昼食になる。地元のお年寄りが冷たい水を持ってきてくれた。

12時半から午後のスタート。黙々と作業する人、和気藹藹と話しながら作業する人。

それでも作業のスピードは一向に衰えない。登山で鍛えたパワーは流石である。

朝が早かったので今日は15時で作業終了。その後、石巻市内の被害状況を視察のため市内を一望できる日和山公園に登る。ここから港の方を見ると、海岸まで真っ平らである。あの日の津波が起きる前までは多くの建物があり海岸は見えなかったろう。

そんな平らな中にお寺の建物と幾本かの松が残っているのが印象的だった。

この公園には、多くの人が集まっている。多くはボランティアの人たちのようだ。外国人の人達も何人か見受けられた。有りがたくうれしいことである。

宿泊地に行く前に道の駅「上品の郷(シヨウホンのサト)」の温泉で汗を流し石巻の特産品の海産物を買う。美味しければ埼玉県連で販売の仲介をしてもいいかもしれない。

宿泊場所は市内から少し山の方の田園地帯にある。水沼東部構造改善センターという公民館のような場所だ。ここまで津波はこなかったが屋根の上に青いビニールシートのかかっている家が随分あった。きっと凄い揺れがあったためだろう。このセンターにはトイレ、水道、ガスは完備している。19時全員が和室に集まり交流を深めながら夕食をとった。

寝るのは隣室の体育館でマットを敷きシュラフで寝た。疲れとアルコールでよく眠れた。翌朝は5時起床。千葉県連の女性たちが味噌汁、鮭、納豆など朝食を作ってくれた。

7時40分出発。8時から作業開始。この日はもう一つのビニールハウスのヘドロ除去である。昨日の経験が役に立ち、皆手際や力の入れ具合も良くなって効率よく作業が進む。

11時半には終了した。

石巻の印象は既に3カ月が経っているのに復興が進んでいるとはとても思えない。やっと瓦礫の撤去が終わり、各道路が通行可能になった程度だ。多くの建物は放置されたままである。何時になったら復興の槌音が聞こえてくるのだろうか？

国民は民度が高いと世界中から絶賛されているのに、政治があまりにもお粗末である。そのしわ寄せが国民、特に被災した人たちにきているが如何にもやりきれない思いで被災地を後にした。